

## 江戸考証学者による『本草和名』の研究

武 倩

北海道大学大学院文学研究科

『本草和名』は延喜年間（918年頃）に、侍医である深根輔仁が醍醐天皇の勅命を奉じて、編纂された日本最古の薬名辞典である。『新修本草』を範にとり、『食経』等によって増補され、千種以上の薬用動植物を収録している。薬の漢名に万葉仮名和訓や日本での産出状況を注記していることから、中国本草書の日本向け注釈書として位置づけられる。

同書は成立後、平安中期を代表する漢和辞典『倭名類聚抄』（934年頃）、日本最古の医学全書『医心方』（984年頃）などに引用されているが、その後、長く伝存が絶えていた。その古写本が幕府の紅葉山文庫で発見されたのを機に、多くの考証学者が本書の研究に取り組んできた。代表的な人物としてまず挙げられるのは、古写本を発見した多紀元簡である。元簡は紅葉山文庫古写本を校訂し、出版したことによって本書を再び世に広めた。その後、狩谷掖斎、小島宝素父子、森立之父子はそれぞれ違う関心から『本草和名』について詳しく研究し、本書の版本に書き入れを加えた。このような研究の蓄積をもとに、狩谷掖斎は『倭名類聚抄』に対する箋注を完成させた。小島宝素と森立之は『新修本草』や『神農本草経』など中国の古逸本草書の復元を成し遂げた。これらの研究成果は江戸時代の考証学の、一つの到達点を示しており、現在の文献研究においても参考されるべき所が多い。

従来、『本草和名』の伝本については、真柳誠氏の報告があり、医学館における考証学の発展については、小曾戸洋氏の報告がある。本研究はこれら先行研究を踏まえた上で、『本草和名』の版本に見られる書入れ、及びそれを基にして編纂された資料の分析を通して、同書に対する江戸考証学者の研究成果を整理・分析することを目的とする。

発表者はこれまでに、森父子自筆書入れ本を底本に、多紀元簡と森立之の考証の仕方について報告を重ねてきた（下記拙稿を参照）。

○武倩（2013）『『本草和名』の諸本に関する一考察—万延元年影写本と全集本との関係を中心に—』（『訓点語と訓点資料』131）

○武倩（2016）「松本書屋本『本草和名』について」（『北海道大学大学院文学研究科研究論集』15）

今回は、狩谷掖斎と小島宝素の考証成果について、以下の主旨で紹介していきたい。

狩谷掖斎は、『倭名類聚抄』への引用に着目して『本草和名』を研究し、版本へ朱・墨・藍の三筆を以て書入れを加えている。その自筆本の所在は不明であるが、掖斎の書入れが小島宝素によって移写されており（国会図書館蔵小島父子自筆書入れ本）、小島宝素の移写書入れがさらに森父子によって移写されている（松本一男蔵森父子自筆書入れ本）。また、岡本況斎も小島宝素の移写本を借りて、それに基づき、掖斎の校語を『本草和名考異』としてまとめている。

これらの資料に見られる掖斎の校語を『倭名類聚抄』に対する箋注（『箋注倭名類聚抄』）に照らし合わせて見ると、その殆どが箋注に反映されていることが分かった。また、『本草和名』と『倭名類聚抄』の関連項目を箋注で詳しく見ていくと、掖斎は『本草和名』の底本に万延元年影写本系統のものをを用いており、同書の祖型の推定にも努めたことが判明した。

小島宝素は、『新修本草』の復元という目標を果すために、『本草和名』を研究しており、版本への自筆書入れは、国会図書館蔵本の他に、静嘉堂文庫蔵本にも見られる。国会図書館蔵本にある書入れについて調査した結果、宝素はそこで、『新修本草』からの引用範囲、両書の間に見られる項目立ての相違・用字の相違を示していることが明らかになった。